松下（まつした）　克己（かつみ）さん

遠州の地域を考える情報誌「エコノワ」
有限会社キーウエストクリエイティブ

[松下克己さん]
バラエティ豊かな浜松。地域密着の情報発信で、デザイン業界の存在感は高まる。

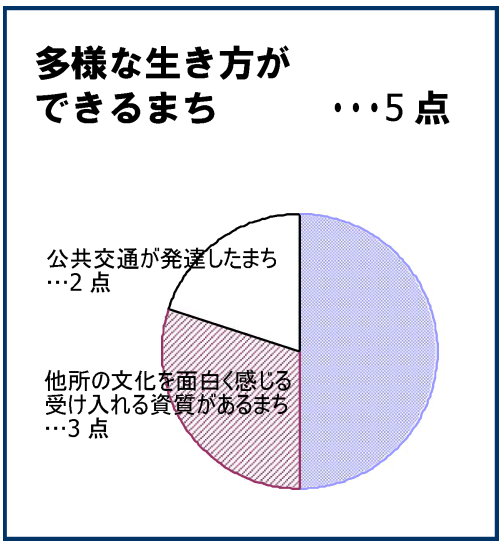
●デザイン業界の存在感を高めたい

浜松は他都市と比べて、経済は豊かで、雇用も豊富だが、大企業が牽引している部分が大きい。どうしてもそこに目が行きがちであるが、大企業を支え、高度な技術を持つ中小企業もたくさんあるのも事実である。こうした技術を世の伝えるためのツールこそが「デザイン」ではないだろうか。デザインは情報発信のチカラを持っている。私たち様なデザイン業界が直接的に産業界と結びつくことによって出来る可能性はまだまだあると考える。ただ、浜松ではその結びつきが弱いのが残念。私たちの努力も足りないが、デザインという業種が認知されていないと痛感している。

浜松は、農村、漁村、山村、そして、都市部において様々な人間のシーンがある。浜松の様々な情報が市民に伝われば、自分が住んでいるまちの姿を再認識し、新しい行動への喚起となる。浜松のシビックプライドを醸成できる。デザインのまちづくりに対する役割は大きい。その役割をもって積極的に社会参加する事によってデザインの存在感を高めることができると考える。

●『どうせ頼むなら良い会社』

顧客が業者を選ぶに当たって、価格を重視することはしかたないことであるが、これに加えて、企業の社会貢献度についても選ぶ基準にしたい。そこで、考案中なのが「どうせ頼むなら良い会社」紹介。地域に根付く企業を紹介する冊子として、価格だけでなく、CSR や地域貢献の取り組みを紹介し、企業の価値を高めたい。私たち市民が良識ある企業のサービスや商品を選択することにより、CSR や地域貢献が企業戦略に必要不可欠なモノになるようにしたい。そうすれば、そんな企業がいっぱいある「浜松」は魅力的な地域になると思う。



【浜松市への期待度グラフ】

●バラエティ豊かな生き方ができるまち

浜松の一番のポテンシャルは「多様性」である。生き方や経済活動、フィールドの多様性をお互いに認め合うことが必要で、色々な価値観があってこそ、まちは面白く、魅力的になる。人は刺激し合って豊かな人生を送れる。生き方の多様性が地域の特色を生むものと考える。

こうした情報を分かりやすく伝えることは、デザインが持つ役割のはず。私たちはもっと「まち」に関わってかなければいけないと思う。

行政に対しては、情報発信の重要性を認め、施策の基本構想の段階から情報発信の計画も組み入れて考えてほしい。

松島（まつしま）　達也（たつや）さん

公認会計士

[松島達也さん]
市民が広く参加する参加型行政が今後のテーマと語る。

●特徴や意図の見える中心市街地づくりを！

全国的に見て浜松は、都市規模の割に、数多くの企業が立地し、一定規模の監査法人が立地できる産業力を持っている。しかしながら、中心市街地の賑いは他都市と比べても弱いと感じている。人が集まることで魅力が集まり、まちは活性化する。広大な市域や車社会といった浜松市の特徴を考えれば、まずは使い勝手の良い駐車場を整備し、静岡市のように歩いて楽しめるまちを目指すべきである。欧米の都市事例を参考に、イベントなどに留まらず公共施設の駐車場を無料化し、中心市街地とへ歩いていける導線を確保してはどうか。

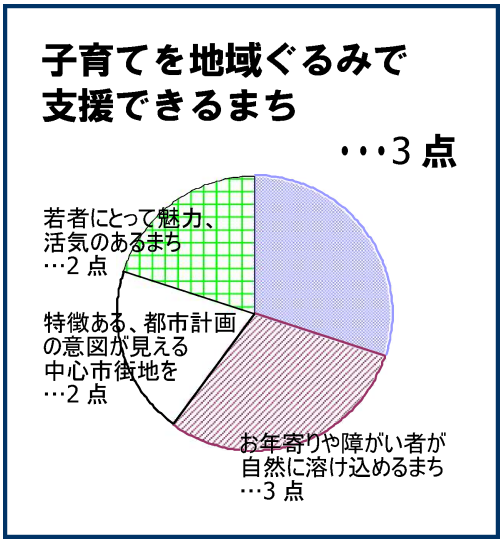
●市民の対話による行政を！

公共部門に対する監査のニーズが高まっている。民間とはルールが違うものの、一般市民として無駄を無くし、不公平感を払拭することで納得する行政を進めてほしい。

市政を進める上で、多くの審議会を置いているが、そこで言われているからそのまま従うのではなく、プロフェッショナルとして議論すべきことはしっかり議論し、相互理解の上でより良い行政を進めていく姿勢が必要である。

●ノーマライゼーションの実現を！

現在の社会福祉施設は、まちから離れたところに数多く立地しており、地域社会との交流が十分でないと感じる。核家族化の進行などにより、子どもたちが高齢者や障がい者と接する機会が昔以上に少なくなってきており、どう接して良いか戸惑っている様子を目にすることがある。障がい者の雇用促進など、ノーマライゼーションに向けた政策の実現は、徐々に進められているが、だれもが地域社会と関わり合いを持ち、安心して暮らしていけるまちづくりを、あらゆる分野で進めてほしい。



【浜松市への期待度グラフ】

●地域資源を活用した子育て支援を！

将来を見据えれば、これまでのように市民ニーズに応じて行政サービスを拡大する時代ではない。そもそも、地域活動は住民自らが協力し合って進めていくものであり、まずは住民が地域に目を向け、関心と参加意識を高めるような施策が必要である。とりわけ、子育て支援については、無関心を装うことではなく、大人が声をかけ、目をかけ、地域全体で子育てしていくことが必要と考える。厳しい経済状況のなか、親が安心して仕事と子育てを両立できるには、元気で優秀な地域の団塊の世代を活用していくことが大事である。

松島（まつしま）　良友（よしとも）さん

浜松経済クラブ　理事長

株式会社西部サービス　取締役

[松島良友さん]
起業しやすい環境を整え、起業を志す方が集まる浜松市になってほしいと語る

●住まいを重視するまち浜松

個人的な感覚だが、浜松市民は衣食住のうち、住まいへのこだわりが強いように感じる。市域に広い平野部があり、住宅用地に困らないことも要因であると考えている。

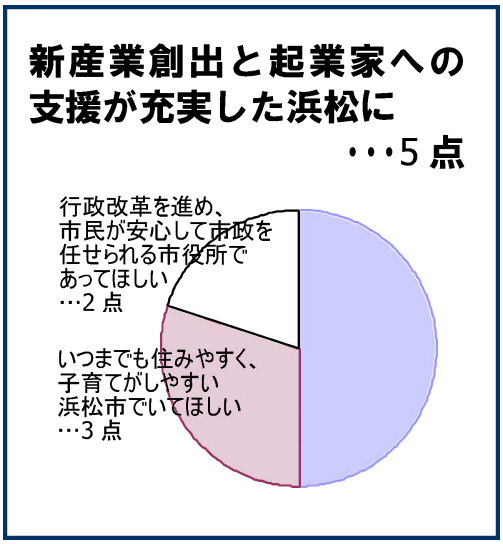
住まいにお金をかける割合が高いということは、仕事柄ありがたいことではあるが、衣服や食事にお金をかける割合の低さが、まちなかの活性化を阻んでいる一因ではないかと分析している。

●新産業が生まれ、起業家が集う都市に！

雇用の場の確保は、市民が生活の基盤を築く際に最も重要な点である。既存産業にいつまでも依存するだけではなく、この地域をリードするような新たな産業が生まれる都市になってほしい。光技術と医療の融合や、新農業分野などに新たな可能性を感じる。また、浜松市内外から起業をしたい人を集めるため、税制優遇や規制緩和による参入障壁の軽減を進め、アメリカのシリコンバレーのように起業家のメッカになってほしい。

●いつまでも住みやすい街であってほしい

浜松経済クラブには、市外からの転勤者もいるが、そうした方は口を揃えて、浜松は本当に住みやすく、子育てもしやすい土地であると言う。現在は行政の努力が結実している成果であると思うが、これから税収が減っていく中、現在の市民満足度をいつまで維持できるかが重要である。企業でも、業績が振るわない場合の対処法は顧客の新規開拓（＝収入増）とコスト削減の 2 つであり、行政でも基本的には同じであると考える。限られた財源の選択と集中、外郭団体の見直し、民間活力の活用を進め、いつまでも住みやすい街であってほしい。



【浜松市への期待度グラフ】

●日本版リーマンショックを起こさない

業界（住宅設備工事）としては、住宅の新築件数が減っていくが、リフォームの需要は増えていくと考えており、将来見通しは悲観していない。

これまでは 1 つの家の中でおじいちゃんおばあちゃんの年金があり、お父さんの給料があり、お母さんのパート代がありと、世帯内で一定の収入があったが、これからは、世帯人員の減少が進み、世帯内の総収入が減ってくる。そうなると、住宅の修繕費用が賄えなくなり、住宅を手放さざるを得ない世帯が出てくる危険性がある。サブプライムローン問題に起因するリーマンショックと同じような状態が発生する危険性を防止する施策が必要ではないか。

松本（まつもと）　健男（たけお）さん

エコアクション 21 審査人

[松本健男さん]
これまで培ってきた知識や経験は、今後産業を発展させていく上で、役に立つ。元気な高齢者には少しでも社会に貢献するべきと語る。

●高齢者が社会に貢献できるまちづくり

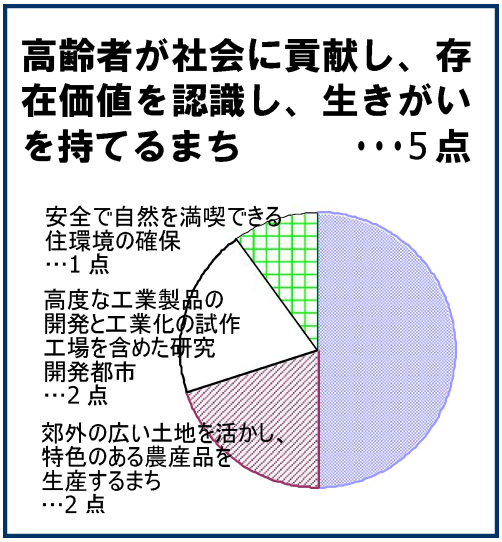
私と同年代の退職した人の中で何もやっていない人がたくさんいる。それは、まだ働けるのに、また、働きたいのに、現状働ける場所がないからだ。今日、高齢者は面倒を見られるばかりの立場ではない。まだまだ元気な人はいる。年齢に関わらず人は何かの役に立っていることが生きがいであると思う。働く人と扶養される人の関係ではなく、市民が可能な範囲で、気軽に社会貢献でき、わずかながらでも一定の報酬が得られるシステムがあれば良いと思う。ある企業に定年退職のない会社ある。そこではこれまでの知識や経験を活かして、60 代の社員が最も活躍しているという。我々世代には、勤労とは報酬を得ることなので、無報酬のボランティアではなく、企業など働ける場所があれば、もう一度社会に貢献しようとする、高齢者が増えるのではないか。

●知識や技術を次世代に

退職した高齢者の中には長年培ってきた高い専門知識や技術を持った人が大勢いる。そんな人材を放っておくのはもったいない。そのような高齢者を集めて、企業の技術力向上等の直接協力、指導することができるような組織をつくってみてはどうだろうか。技術支援を求めている企業に対してハローワークのようなシステムで技術者を派遣する。85 歳くらいまでなら、頭だけなら働ける。今までにユニークで様々な産業を創出してきた浜松市の気質に合っていると考える。

●省資源・省エネルギーの普及を

私はこれまでの知識や経験を活かして、エコアクション 21 の活動をしている。活動を通して、企業にとって省資源・省エネルギー化を推進させることは、企業の利益を生み、しかもそれが地球環境の保護に役立つことを認識してほしい。高度経済成長期に、公害防止機器の設置が義務付けられたが、企業は利益を生まないものへの投資に強く反対した。しかし、公害の防止と企業の発展は両立でき、公害の無い環境を取り戻すとともに、世界有数の工業国に発展した。その上に公害防止設備産業を生み出した。日本にはそのような力がある。かつて公害防止に向けたようなパワーを、省資源・省エネルギーに向けて、企業が成長を続けてほしい。私自身も企業活動で得た知識を少しでも社会役に立ててもらえるよう努力したい。



【浜松市への期待度グラフ】

南畑（みなみはた）　直由（なおゆき）さん

グランドゴルフ グラスホッパーズ代表

バウンドテニス積志同好会代表

[南畑直由さん]
健康のために、グランドゴルフを続けている。

●浜松を風格あるまちに！

約 50 年前、転勤で初めて浜松駅に降り立ったとき、街の顔としての駅前が寂しかったのを覚えている。伝統あるまちなのだから、印象的で風格あるまちづくりを進めてほしい。仙台市などは、大樹の街路樹が整備されており、威容を誇っている。

浜松国際ピアノコンクールを継続するなど、浜松が誇れる文化を大事にしていくべき。

●住民主導で美しい街並みづくりを！

海外の人から、沿道の様々な色やデザインの看板が並んでいることについて、異様な光景だと言われたことがある。 言われて気付いたが、確かに思い思いの看板が、道路標識のように至るところに設置され、美化を損ねていることを痛感した。

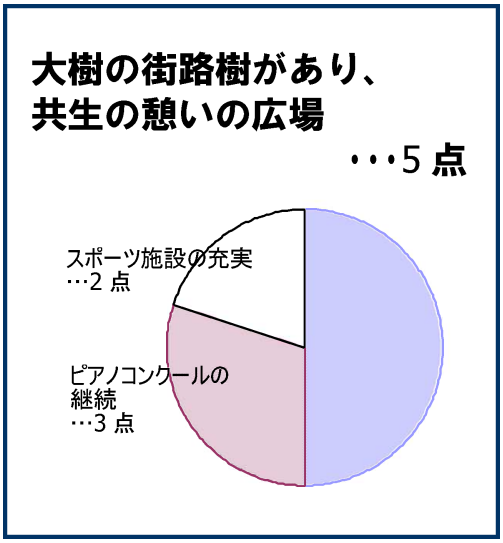
自分の住む町も、屋根や壁が不統一の色となっている。ぜひ、住民同士が話し合い、規制なども活用して、電線類の地中化も含めた、統一感のある落ち着いた美しいまち並みづくりを進めてほしい。

住民は、だれもが自分たちの住む町を大事に考え、地域の美化や発展を望んでいることから、行政は、予算を使って自らやるのでなく、住民主導で取り組むための手伝いをしてほしい。

●人々が集う場づくりを！

ニュージーランドでは、広場に芝生を敷き、地域の人々が気軽に集まる広場をあちらこちらに設けている。芝生を敷くことにより、人が自然に集まり、そこから交流が生まれると聞く。

小学校のグラウンドや公園なども芝生を敷くことによって、地域住民が集まり、憩い、交流する場になるのではないか。



【浜松市への期待度グラフ】

●各小中学校を地域スポーツの場に！

現在、グランドゴルフやバウンドテニスなどにより、地域の高齢者がお互いにスポーツを通じて健康づくりと交流の場づくりを進めている。

住民活動は小学校や中学校単位で行うことが多く、活動場所が不足していると感じたことはない。ただ、小中学校施設は、学校教育を基準に建設されていることから、今後改修等を行うときは、学校教育だけでなく、地域スポーツ、生涯スポーツの観点から、地域住民の声を聞いてほしい。

宮崎（みやざき）　篤郎（とくろう）さん

宮崎酒店 16 代目当主、前浜松市消防団西区支団長

[宮崎篤郎さん]
市全体ではなく 7 区それぞれがプラスマイナスゼロの収支が理想と語る。

●まずは逃げることを考える！

逃げることを考える。

防災においては、これが 1 番重要。逃げて、自分や家族の身を守る。それができなければ、他人を救助することもできない。

高齢者などの災害弱者の救出をどうするかが課題であるが、自治会等で保有する名簿は個人情報が含まれており、共有することができない。

個人情報保護の重要性は理解できるが、誰が災害弱者かを地域が把握し、災害弱者本人が救助を必要としているのかの意思表示を周りに知らせるため方法を考えなければならない。

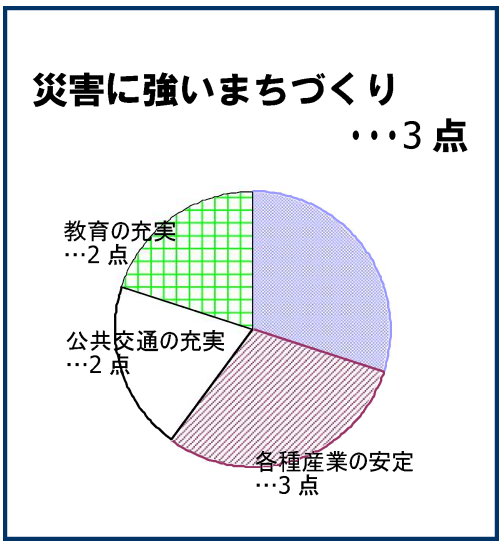
●合併に対する様々な思いは、ゼロベースでスタートを…

そろそろあきらめても良いのでは…。

良くも悪くも、合併前の役場は小回りが利いて便利だった。また、地域住民に対する財政的な援助も行っていた。これを現在の状況と比較して、「合併前の方が良かった。」と言う人たちがいるが、合併することを選んだのは我々だし、合併から 8 年も経つし、そろそろ気持ちを切り換えて、ゼロベースで考えていかなければならない。

防災についても、役場頼みという考え方が染み付いているため、地域の防災に対する意識は低い。防災に対する備えは自己責任であると意識を改めて取り組んでいくことが重要であると考える。

その一方で、地域の消防団に対する意識は高く、「やりたい」という人が多い。20 代～50 代と幅広い年齢層の方が所属し、団員が不足するという状況は起こらない。



【浜松市への期待度グラフ】

●暮らしやすさの追求を！

今後の浜松に期待するのは、「暮らしやすさ」。

市民一人ひとりが自分勝手なわがままを言わず、当たり前のことを当たり前にやるような地域になってほしい。これができれば「自助・共助」が自然に成り立っていく。

また、市全体ではなく、7 区それぞれが収支をプラスマイナスゼロとし、自立した運営を行えるようになってほしい。地域の収入を増やすため、地域特性を活かした産業の育成などについて、行政がしっかり導いていけるのかが鍵となる。

宮田（みやた）　洋（ひろし）さん

遠州鉄道株式会社　経営企画部長

[宮田洋さん]
浜松市民の郷土愛に支えられながら、これまで以上に地域になくてはならない企業になっていきたいと語る。

●郷土愛に支えられて

浜松市民は郷土愛が強いので、全国規模や外資の店舗が参入しても、地元の企業は変わらず利用してもらえる。また、浜松市民同士は初対面で出身校を聞く方が多く、同じ高校の出身というだけで急に打ち解けたりということもあり、そうした面からも、地元意識の強さが伺える。

●お洒落して出掛けたいまちなかに

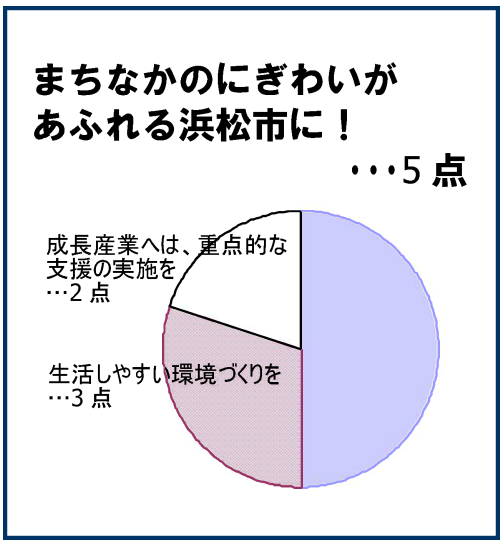
浜松市はものづくりのまちとして発展を続けてきており、働く場所が市内にある。当たり前のことではあるが、これはこの地に住むという選択をする上で重要なことである。

しかし、事業所は郊外に多く点在しているため、自宅から仕事着のまま車に乗ってそのまま職場に向かうということが出来てしまう。まちなかに職場がある商業都市とは違い、仕事帰りにまちなかに寄るという習慣がない。まちなかのにぎわいに欠ける要因はそこにある。まちなかを活性化させるためには、自宅と職場を車で往復している方が、お洒落して出掛けたいと思えるようなまちなかにしていく必要があるということである。

●将来を見据えたまちづくりを

全国でも有数の施設、道路を管理する浜松市にとって、人口が減少し、高齢者の割合が増えていく中で、まちづくりをどうしていくかというのは非常に重要な問題である。コンパクトシティという発想も良い。また、自分の住んでいる土地には愛着を持っている方もいるので、インターネット環境を整備し、買い物の利便性を高める方策もある。

税収が減少していく中、全体的な経費の削減を進めるだけでなく、観光業のようなこれから発展が見込まれる分野については、育成のために支援をしていくことも必要である。



【浜松市への期待度グラフ】

●便利なまちへのお手伝い

自動車を持たない世帯も増えており、鉄道沿線に住みたいという需要は、ますます高まっていると感じる。鉄道沿線の宅地開発について、規制緩和が進んでほしいと考える。

一方で、浜松の農産物はおいしいという話をよく聞くし、私自身もそう感じる。開発すべきところは開発し、農業を推進するところは営農しやすい環境を整えて、すばらしい農産物も生みつづけてほしい。

様々なライフスタイルの方が生活する中、地域の方の生活に深く関連のある企業であるので、これからも地域の方に愛され、なくてはならない企業でありたい。

森下（もりした）　亜希子（あきこ）さん

NPO 法人はるの山の楽校職員

［森下亜希子さん］
春野へ移住してきた人たちを中心に、毎月、自立できる地域づくりについて話し合う。

●自然に関心を持ったわけ

名古屋市に生まれ、自然に触れる機会が少ない環境で育った。三重県の片田舎で病院に勤めていた時に地震が起こり、もし電気・ガス・水道が止まったら生活していけないと不安を感じた。この時、年配の患者さんに「畑に野菜があるし、水が湧いているところもある。火を焚けば問題ない。」と諭され、いかに、整備されたライフラインに頼って生活し、自然を利用するすべを知らないかに気づかされた。

その頃、ドイツの環境都市・フライブルクを訪ねた。寒さを凌ぐためにガラスを三重にした省エネ住宅、まちの中にある小水力発電施設など、電力を自給自足するシステムが整っているのを見て、今の日本の暮らしは自然から離れすぎていると感じた。自然のことを知りたいという思いが強くなり、岐阜県立森林アカデミーに入学。人間も含めて、生きものは、たくさんのつながりの中で生きていることを学んだ。

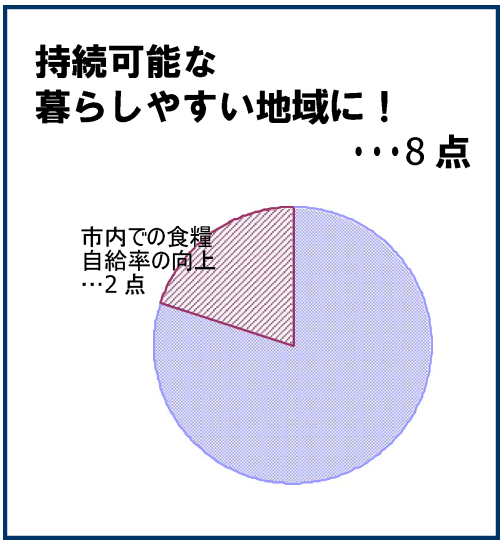
●春野に暮らしはじめて

ふじのくに暮らし推進隊（地域おこし協力隊）として春野にやって来て、定住することになった。春野は、集落が分散しているのが特徴。春野全体でまちおこしをするのは難しいが、集落ごとに助け合う自治意識が高いという長所もある。

集落をある程度まとめるのは経済的かもしれないが、環境を守るためには、山を管理できる場所に人が住むことが必要。浜松は市域全体が天竜川水系であり、山間部の環境を守ることは、まちなかに住む人の役にも立つ。

●自給自足できる地域を目指したい

春野で、春野の野菜を買える場所がないことに驚いた。地元のものが地元で売れる場所をつくり、地域の中でモノが循環するようにするべきである。



【浜松市への期待度グラフ】

少ない品目を大量生産して都市部に売り出す農業は、無駄が多い。春野は、地域内自給自足のモデルとなることができる地域。農産物の流通やエネルギー自給を進め、自立した地域になればと考える。

●生き物として健やかに暮らせる社会に

人が生きていくために本当に必要なのは、お金ではない。中山間地域には、食べ物、環境、人間関係など、人が生きものとして健やかに暮らすための土壌がある。これを、どうやって残していけるかが今後の課題である。都市部においても、もう少し自然に近づいた暮らしができるようになると良い。

森本（もりもと）　悠己（ゆうき）さん

有限会社アップハート　店舗支援室長

［森本悠己さん］
地元野菜の素晴らしさを提供者である飲食店がもっと伝えていきたいと語る森本さん

●地域との繋がりを大事にする浜松

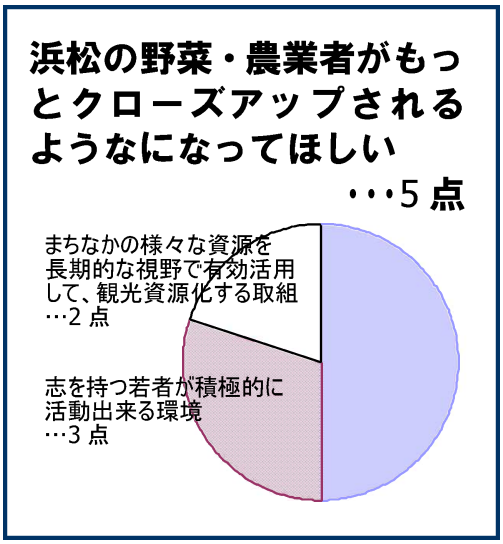
浜松は中心部に賑わいがある一方、自然が身近にあり、市民が地域との繋がりを大事にしていてとても住みやすい。新入社員は浜松へのＵターン者もおり、人と関わること好きな社員が多い。また、勤務時間も長く、大変な職場だが、社員はガッツがあり、それも浜松市民の特徴ではないかと感じる。お客さんも年齢層が広く、常連客や、さらにその人達からの紹介でファンになっていただく人も目立つ。これも地域との繋がりを大事にする浜松の特徴である。

●自分の大切な人をもてなすには？

無農薬野菜にこだわることとなったきっかけは、「自分の大切な人をもてなすにはおいしくで安全なものを食べてもらいたい」という思いが出発点になっている。付き合いのある地元農家の無農薬野菜を、美しい見せ方・美味しい食べ方で提供し、お客さんが喜んでくれることが一番のやりがいである。浜松の野菜は１年を通して手に入るものが多くて品質も非常に良い。うなぎや餃子と同じように、浜松のおいしい野菜も地元の食文化として定着してほしいし、全国にも広まってほしい。また、店としてそのお手伝いができれば良いと考えている。

●飲食店の取り組みでまちなかの活性化を！

浜松のまちなかは平日と休日、昼と夜の人手の差が激しい。夜に多くの人が集まるのは、様々な魅力ある飲食店が街中に溢れているからこそである。現在も、まちなかの飲食店が合同で開催しているイベントがあるが、行政の手も借りつつ食をテーマにしたさらに大規模なイベントができれば、更にたくさんの人が集まると考える。そうした人々を十分におもてなしできる店舗はそろっているし、イベントをきっかけに気に入った店を見つけてもらえれば、リピーターも増え、まちなかの活性化が進む。



【浜松市への期待度グラフ】

●まちなかの古い建物を活かして！

古いビルをリノベーションした利活用などが最近まちなかで行われているが、こういった志を持つ若者が集まる風潮は新しい文化を生むと思う。浜松に住む人は地元が好きな人が多いのだから、そのような人たちがもっと輝ける環境づくりが必要である。

さらに、まちなかの古い建物には、趣のあるものも多く、長期的な視点で、それらを将来の観光資源に活用していくための準備もしていければ良いのではないか。